

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になればと思います。大切な人の死が、縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。また、悲しみを乗り越えない生き方であればと思います。

初七日

1. 成仏

仏教とはどのような宗教なのでしょう。仏教とは、「仏に成る教え、仏の教え」であります。仏になる教えだから仏教とは、文字のままじゃないかと思われるかもしれません。そこで、キリスト教という言葉を考えて下さい。キリスト教はキリスト様の教えです。キリスト様は、我々人間がいかにかに生きるべきかを教えるのです。生き方を説く宗教ですか

ら、生きることを終えた時、その生き方によって天国か地獄に行くことになるのでしょうか。

これに対して、仏教は仏に成ることを説いているのです。例えば、仏教では同性愛の是非を語ろうとしません。それは、仏に成ることに直結しないテーマであるからです。もちろん仏教の戒律として、律蔵の中で性も含めて細かなルールが決められています。それは、成仏のため

ではなく、出家者の集団生活を維持するためのものです。

仏教の目的は成仏にあるのです。だから、シャカ教とは言わないのです。一方でこの目標設定はアプローチの多様性を生みました。それは、山の頂上を決められたが、登るルートはいくつもあるようなものです。だから、仏教には宗派が多いのです。日本にだって、数え切れないほどの宗派があります。

2. 日本の宗派

日本仏教の数え切れないほどの宗派、私はそれを数えようとは思いませんが、ここでは主な違いを少し申し上げたいと思います。例えば、浄土真宗以外の宗派では多くのお坊さんが修行をしています。何の、ための修行かといえば、仏に成るためです。先ほどの例えで言えば、頂上を目指して一生懸命に登るのです。日常的に修行をするのが難しい一般の人達も善を積まねばなりません。そして、その目的を達する前に亡くなれば、どうするのでしょうか。そこで七日参りが必要になります。この七日参りというのは、のこった人達が亡くなった方の修行を追い

足すのです。それを追善供養と言います。それが満ちて故人は仏に成るのです。ところが、浄土真宗は追善供養をしません。すなわち七日参りの意味が異なります。浄土真宗は即得成仏を説きますから、亡くなると直ぐに仏に成るのです。従って浄土真宗の場合、七日参りは追善供養ではなくお聴聞(ちょうもん)のご縁なのです。お聴聞とは仏のお話しを聞くことです。お坊さんのお話を聞くことではなく、そのお話を通して仏の教えに耳を傾けることなのです。

浄土真宗においては、成仏は死後直ぐに成し遂げられるのです。この成仏は本人の修行の結果ではないのです。阿弥陀様の力によって成仏するのです。私の力で成仏するのではないのです。

一生懸命に修行をする人達がその結果として成仏します。また、一方で自らの修行によらず成仏する人がいます。これに対して疑念をお持ちの方もいらっしゃるでしょう。しかし、私はこうした疑念に反証を示すことはできません。私は死んだことがないので、動画も写真も示すことができません。

3. 信じる

阿弥陀様の力によって成仏するという何を何故いえるのでしょうか？この世に生きる我々の誰もが、それを肯定も否定もできる確証を持ち合わせません。確証がないというのは、阿弥陀様の力の存在を信じているかどうかでしょう。存在の認識と言ってもいいでしょう。科学的根拠もなく信じるというのは、宗教の教理的裏付けのない信仰につながる危険性もあります。それは日本の宗教の弊害でもありました。そうした中で、科学的根拠の装いで信者を獲得しようとしたカルト宗教の動きもありました。

修行をするなら、こういう手順で修行をなさいと言うこともできるでしょう。信じることの方法論は、成り立ちにくいと思います。論理の構築の上に信じるという行為をなすというのは、私のような思索を伴わない生活をしている者には難しいのです。私は感覚的に信じたり、信じなかったりして暮らしています。人の出会いの中で初対面でも信じ合えたり、長年の付き合いにも関わらず疑念を持ち続けたりします。

4. あるお葬式

この信じることについて、私はあるお葬式で教えてもらいました。

それは、一月末、我が家の夕食が終わった頃に電話が鳴りました。

「今、うちの主人が息を引き取りました」と。私は直ぐに枕経に参ると言っ、車を走らせました。走りながら「いったいどうしたというのだ。あの主人といっても若いはずだ」と思いました。

何も年齢順に死に至るとは思いませんが、若い人が亡くなると「いったいどうしたと言うのだ」と思います。このご主人も40代前半でした。奥様が説明してくれたことによると、ご主人は2年間ほど深刻な糖尿病だったそうです。入退院を繰り返しました。この死は、暫くの退院の間のことだったそうです。夕食の支度をしていた奥さんがご主人の異変に気付いて、救急車を呼びました。ご主人は救急搬送中に亡くなったそうです。

私は、それを聞いた時に「なぜ、もっと長く病院に居させてもらわなかった。入院していればもう少し

でも長く生きられたのではなからうか」と思いました。私はそれを口にしなかったけれども、このお宅で七日参りをしている中で教えられたように思います。もちろんこのご主人は長く生きたかっただろうけど、病院でその時間がいくばくか延びるより、家族と共に過ごす時間が大切だったのではないかと。この家族は、奥様と高校1年生の長男と小学1年の長女の4人家族です。

私たちは人生を時間の長さで考えてしまうことがあります。どれだけの時間を生きたということより、どんな時間を生きたかが大切なように思います

5. 出棺

死は、ただ死で終わるものではありません。私たちが目を向けないだけです。私たちは死から大切なことを教わります。

このお葬式での出棺シーンも私には忘れ得ぬ姿です。

式場の玄関には、霊柩車が停められ後ろのドアが開かれました。その脇に、小学1年の娘が一人で立っていました。彼女のお兄ちゃんは父親の兄弟と

お棺に手を添えて、霊柩車に乗せようとしています。お母さんはそのお棺に付き従っていました。出棺を見守っていた私は、その女の子に気付きました。

この子は、小脇に30cm程の縫いぐるみを抱えていたのです。私は、この子が昨夜のお通夜でも縫いぐるみを抱えていたのを思い出しました。そしてお葬式の間も抱えていました。

この時、私がこのかわいい少女がどれほどに父親の死を理解しているのだらうと思いました。この思いの直後に私の心は強い衝撃を受けたように感じました。彼女は、理解していたから縫いぐるみを抱いていたのです。父親の死は、つらく、悲しく、不安なものでしょう。この耐えがたい時を越えるために、彼女は縫いぐるみを握りしめていたのでしょう。私には忘れ得ぬ情景となりました。この時以後、私は彼女の縫いぐるみを抱えている姿を見ていません。

6. お父さんはどこ？

私にはさらに教わることのあ

ったお葬式でした。

このお葬式は、寺の住職としては厳しい日程となりました。真冬の土日に通夜葬儀となりました。冬は通常より少し法事の多い季節です。加えて、私たちの宗派独特の門徒勤の報恩講が土日に予定されています。

お参りの約束をしているそれぞれの方に訳を話して、少しずつ時間を変更してもらいました。誰もが、お葬式なら仕方がないと言って、時間変更に同意してくれました。私は、喪主である奥様にお願いをしました。本来なら、火葬場でお骨を拾った後、寺の本堂に来ていただいてお勤めをしますが、時間を短縮するために私が火葬場に行って収骨室でそのお勤めをさせて欲しいとお願いをしました。この後にお参りをするお宅が火葬場に近い所なので、そうすることで待ってもらう時間が短縮できるからです。奥様の同意をもらった私は、火葬場の炉の前で送った後、飛び出して一軒のお宅にお参りをしてから、火葬場に戻ってきました。

私が硬質の草履で火葬場の大理石の床を歩くと、足音が石造風の建

物の空間に響きました。収骨室のドアの外側では、16才の少年が背筋を伸ばして立っていました。その眼差しはドアを射貫きかねないものでした。私の足音を聞いた彼は、私の方に身体を向けました。数歩足をすすめて、私の正面に立ちました。こわばった顔で。

「質問があります」

「はい、どうしたの」

「うちのお父さんはどこに行ったのですか？」

私はたじろぎました。多くの人が、大切な人を亡くしたとき、「どこに行った？」と思うのを聞きます。ドアの向こうにお骨になっているなどと、ごまかしは効きません。

私はちょっと待ってくれるように頼みました。

「あなたのお父さんは仏さまになったと、お経に書いてあります。でも、この答えで納得いかないと思います。僕は、坊さんだけれど見てきたわけではないからねえ」

「……」

「今、確かなことはあなたの気持ちです。あなたはどんな気持ちで尋ねた？お父さんのことが大好きで、だいすきで……。その思いがいっぱい

でしょう」

「お父さんも同じ気持ちだったと思いますよ。救急車の中で息を引き取って往かれるとき、あなたのことを大好きだと思っただろうと思います。お母さんのこと、妹さんのこと、みんな大好きだと思っていたでしょう」

「だから、お父さんは仏さまに成ったと思います。阿弥陀さまに仏にしてもらったと思います。だって、仏さまに成ったら、仏さまの仕事ができますから。あなた達を導き、救い、見守っていくのが仏さまの仕事で

す。少なくとも、あなたの命の続く限り見守っていくことができます」人は大切な人をのこして往くから仏に成るのだと思います。私はなかなか仏教の論理を理解しがたいのですが、人は大切な人を思って往くときに仏に成ると思っています。大切な人をのこしてきたから、大切な人を見まもりたいからこそ成仏だと思っています。私は、七日参りのご縁によって仏の思いにあいたい。仏の教えに遇うのが、七日参りだと思っています。